土佐日記

門出　―　現代語訳　―

男も書くという日記というものを、女（である私）も書いてみようと思って書くのである。

某年の（陰暦）十二月二十一日の日の午後八時頃に、出発する。その事の次第を、少しばかり物（紙）に書きつける。

ある人が、（地方官としての）任国での四、五年（の任期）が終わって、慣例の諸事務を全てし終えて、（新任の国司から事務引継ぎ終了を証明する）解由状などを受け取って、住んでいる官舎から出て、船に乗ることになっている場所へ移る。あの人この人、知っている人知らない人が、見送りをする。長年の間親しく付き合っていた人々は、別れがたく思って、一日中、あれこれとしていて、大騒ぎするうちに、夜が更けてしまった。

二十二日に、和泉の国までは（たどり着かせてほしい）と、無事であるように願をかける。藤原のときざねが、（馬は使わない）船旅であるけれども、馬のはなむけ（送別の宴）をする。身分の高い人も普通の人も低い人も、すっかり酔っぱらって、たいそう不思議なことに、（塩がきいていて「あざる《ものが腐る》」はずのない）海のほとりで、「あざれ（ふざけ）」合っている。

二十三日。八木のやすのりという人がいる。この人は、国府において決して重用された者でもないようである。そんな人物が、立派な様子で、餞別をする。前国守の人柄であろうか、国人の心の常として、「今更（見送りに行っても仕方がない）」と言って現れないものであるが、真心のある者は、憚ることなくやって来た。これは、物をもらったから褒めるわけではない。

二十四日。国分寺の住職が、餞別にお見えになった。上も下も、ありとあらゆる身分の人々、子供までが酔いしれて、一という文字すら知らない者が、その足を十文字に踏んで遊ぶ。